新富町文化財調査報告書 第14集

県営農村基盤総合整備パイロット事業(尾鈴Ⅱ期地区三納代・溜水・突原工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

三納代地区遺跡

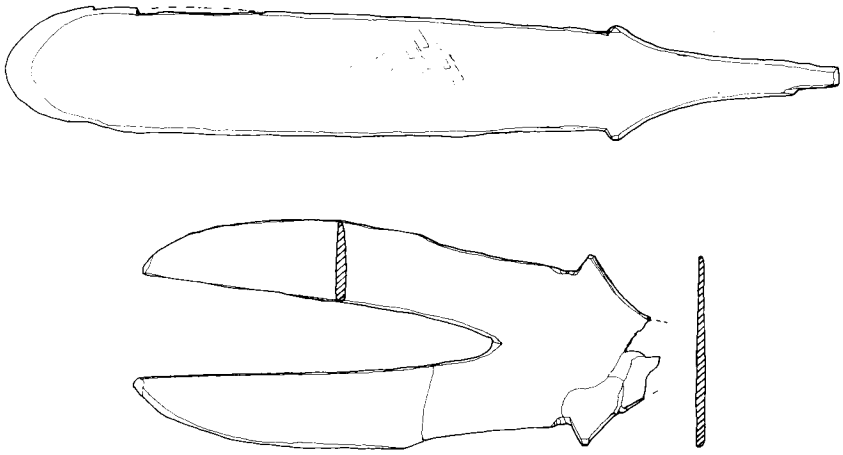
SHI DO HIRA
志戸平遺跡

KAZA HAYA
風早第Ⅰ、第Ⅱ遺跡

OKU MU TA
奥牟田遺跡

溜水地区遺跡

TAMARI MIZU
溜水第Ⅱ遺跡



1992.3

宮崎県新富町教育委員会

序

新富町教育委員会は、宮崎県の委託を受けて、平成３年度、三納代・溜水・突原地区県営農村基盤総合パイロット事業地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその概要報告です。

三納代地区遺跡の調査では、弥生時代終末から古墳時代前期にかかる水田耕作に伴うものと考えられる溝状遺構が大溝にともなって検出され、また、近接して同時期の堰も確認されました。この遺跡からは、水田遺構は確認されていないが大量の土器片にまじり、木製の農耕具である叉鍬・柄・平鍬・槽（容器）が出土し、本格的水田農耕を裏付ける貴重な資料となりました。

発掘調査に際しましては、宮崎県一ツ瀬土地改良事務所および一ツ瀬土地改良区、地元各地区土地改良組合、また工事業者である㈱井関建設、㈱川北工務店、宮崎県農業開発公社、㈱九州建設工業などをはじめ、地元町民の皆様の御理解とご協力を頂き、ここに心から御礼申しあげます。

平成４年３月

新富町教育委員会

教育長　清　　郁雄

例　　言

1. 本書は、三納代地区のほかの県営農村基盤総合パイロット事業に伴い、平成3年度に実施した三納代地区の志戸平遺跡、風早第Ⅰ・Ⅱ遺跡、溜水地区の溜水第Ⅱ遺跡の発掘調査の概要報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　新富町教育委員会

教育長		清　郁雄	
社会教育課	課長	新名正坦	
〃	課長補佐	小野　保	
〃	係長	斉藤久明	（事務担当）
〃	主事	有田辰美	（調査担当）

宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係　主事　吉本正典（溜水第Ⅱ遺跡調査担当）

調査指導・協力

福岡市教育委員会	山口譲治	（特別調査員）
宮崎大学助教授	柳沢一男	（特別調査員）
宮崎県教育庁文化課	北郷泰道	（調整担当）

3. 本書の執筆・編集は有田がおこなった。
溜水第Ⅱ遺跡については、県文化課　吉本氏に執筆をお願いした。

本　文　目　次

第一章　調査に至る経緯 …… 1

1.　新富町の位置と地勢 …… 1

2.　調査に至る経緯 …… 2

第二章　三納代地区遺跡 …… 3

1.　志戸平遺跡 …… 5

2.　風早第Ⅰ遺跡 …… 6

3.　風早第Ⅱ遺跡 …… 11

4.　奥牟田遺跡 …… 13

付.　突原地区遺跡確認調査 …… 13

第三章　溜水地区遺跡 …… 23

1.　はじめに …… 23

2.　調査の概要 …… 27

3.　遺構と遺物 …… 27

4.　おわりに …… 27

挿　図　目　次

三納代地区遺跡

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　三納代地区遺跡位置図 …… 4
第３図　志戸平遺跡遺構平面図 …… 7
第４図　風早第Ⅰ遺跡遺構平面図 …… 9
第５図　風早第Ⅱ遺跡堰平面図 …… 12
第６図　風早遺跡出土土器 …… 14
第７図　風早遺跡出土木製農具実測図 …… 14
第８図　奥牟田遺跡遺構平面図 …… 15
第９図　突原地区遺跡遺構平面図 …… 17

溜水地区遺跡

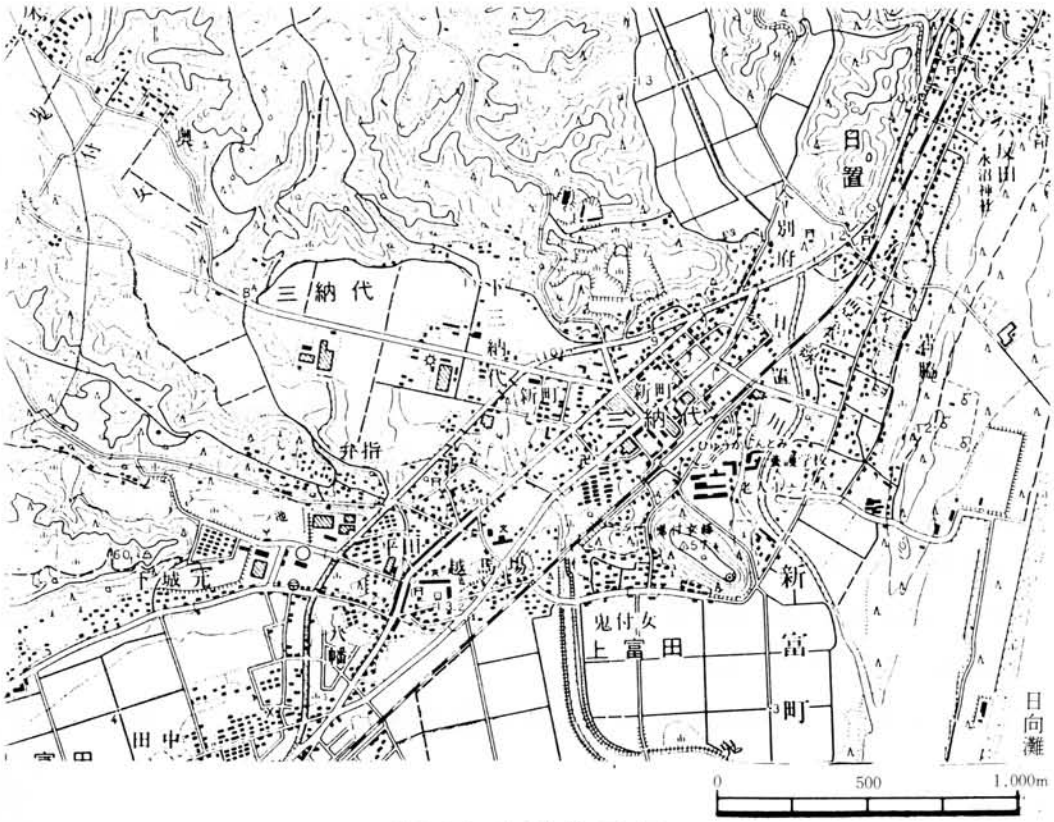
第１図　遺跡位置図 …… 23
第２図　調査グリッド配置図 …… 24
第３図　層位断面図（基本層序は下記） …… 25
第４図　礫群実例図 …… 25
第５図　Ｄ・Ｉトレンチ遺物・焼礫平面分布図 …… 26
第６図　石器実測図　(1) …… 26
第７図　石器実測図　(2) …… 27

第一章　調査に至る経緯

1.　新富町の位置と地勢

新富町は、宮崎県の中央部北を占める児湯郡に属し、西に西都市、北に高鍋町、南に一ツ瀬川を界し、宮崎郡佐土原町に接し、東側を日向灘に臨む。県都宮崎市より主要交通動脈となっている国道10号線・地方幹線鉄道ＪＲ日豊本線を北に約20㎞と比較的交通の便に恵まれ、気候は、温暖である。町域は一ツ瀬川左岸の主に水田やハウス園芸に利用される沖積平野と畑作に利用される洪積台地に占められている。この洪積台地は広く宮崎平野に広がる平坦地の顕著な段丘地形となっており、地形区分でいう茶臼原面（海抜約120m）、三財原面（海抜約90m）、新田原面（海抜約70m）の三つに分けられる。

この町域のほとんどを占める洪積台地を大きく東西に開析して、鬼付女川がほぼ東流している。この鬼付女谷の洪積台地裾部と一ツ瀬川左岸の台地裾部には数段の河岸段丘が発達し、河川との間には沖積平野が広がっている。また、日向灘に臨む東部海岸平野には、宮崎平野と同様、数列の砂丘が発達している。



第1図　遺跡位置図

2. 調査に至る経緯

平成3年度、新富町内で宮崎県一ツ瀬土地改良事務所がほ場整備事業を計画した三納代地区、溜水地区、突原地区の埋蔵文化財について県教育庁文化課に照会があり、文化課および新富町教育委員会では、事業予定地内の埋蔵文化財についての試掘調査および分布調査を実施した。その結果、三納代地区の志戸平、風早・奥牟田地区および溜水地区、突原地区に遺物（土器）の散布が認められ、遺構の存在が予想されていた。

これを受けて県教育庁文化課、県一ツ瀬土地改良事務所、一ツ瀬土地改良区、新富町教育委員会、町耕地課と事業予定地内に所在する埋蔵文化財について協議した結果、現地調査は、諸般の事情から水稲の刈り入れが済む8月上旬からとし、ほ場整備事業が急がれる三納代工区のうち、遺跡の所在する志戸平、風早、奥牟田地区の調査を段階的に進めることとし、遺跡の所在の不明なその他のついては表土の削平・移動が比較的浅く、少ないことから埋蔵遺構に影響を与えないことも考えられ、排水溝の掘削・表土剝ぎの工事を中心に立ち会い、確認することになった。また、遺構が確認された場合は、再度協議することが確認された。突原地区については部分試掘を進め、その調査結果により遺構が確認されず工事立ち会いにより確認することになり発見にあわせ協議することとなった。残る溜水地区については前年度事業が見送られていた工区にあたり、遺構の所在が予想されたA・B地区のうち、現状保存が困難な部分について、全面発掘することとなり、遺構の所在の不明なその他については、工事立ち会いにより確認することになり発見にあわせ協議することとなった。

調査は、新富町教育委員会が主体となり、三納代地区・突原地区については、社会教育課主事有田があたり、溜水地区については、県教委文化課主事吉本正典氏の派遣を受け、調査を行った。

調査の結果、三納代地区では、志戸平、風早第Ⅰ・風早第Ⅱ・奥牟田遺跡が確認され奥牟田遺跡の古墳時代後期～奈良・平安時代の遺物散布を除いて、弥生時代終末～古墳時代前期を中心とした遺跡であった。このうち、特に風早第Ⅱ遺跡では古墳時代初頭と考えられる水田遺構に伴う「堰」の一部が県内ではじめて確認された。

また、溜水地区では、溜水第Ⅱ遺跡（A・B地区）が確認され、旧石器時代と考えられる石器群が採集されている。

なお、突原地区は試掘の結果、まとまった遺構・遺物は、検出されていない。

第二章　三納代地区遺跡

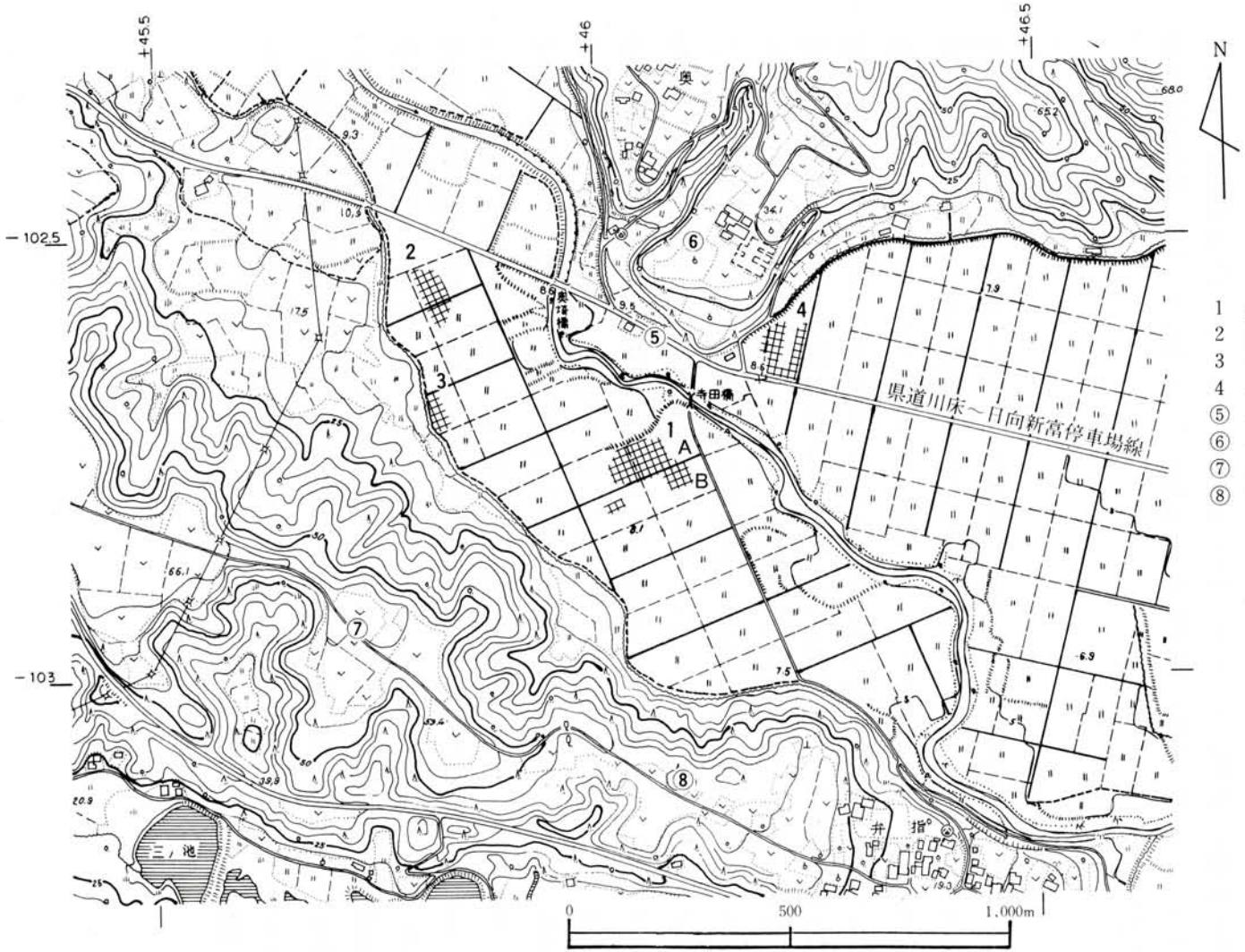
今回この三納代地区遺跡群では、志戸平（しどひら）遺跡、風早（かざはや）第１遺跡、風早第２遺跡、奥牟田（おくむた）遺跡が調査され、それぞれ、字名を遺跡名とした。

本章では、全体の立地について概観し、各遺跡ごとの立地については、遺跡の部分で説明する。

〈立地と環境〉

この三納代地区遺跡の所在する下鬼付女谷周辺は、新富町の地形において優勢な洪積台地を西から東に大きく開析して流れる鬼付女川の流れも比較的緩やかな下流域に属し、台地の裾部には、河岸段丘や小さいながらも扇状地形が発達している。また、鬼付女川の流路は、東側下流域を砂丘列により流れを止められ、新田原台地より派生した丘陵列と鬼付女峰（標高約56m）の間に流路をもとめている。この為か昭和58年９月には、豪雨のため町の中心街を形成する平田地区に大水害をもたらし、さらに河川改修のなった平成２年９月には、今回調査した志戸平遺跡、風早第Ⅰ遺跡、風早第Ⅱ遺跡も水没冠水している。

周辺の遺跡としては、北側台地上には古墳時代の住居跡約 280軒が確認された上薗遺跡や14基の古墳の周溝が確認された蔵園古墳群（県指定富田村古墳の一角を形成する）や地下式横穴墓１基と弥生時代に上る土壙墓７基、縄文時代後期の住居跡１軒が確認された倉園遺跡があり、さらに奥遺跡（弥生～古墳時代：遺物散布地）、奥崎遺跡（弥生時代終末期：遺物散布地）があり、西側約 500mには、年神遺跡（弥生～古墳時代：遺物散布地）、南西の台地上には、県指定富田村古墳７・８号墳や弁指平遺跡（弥生～古墳時代：遺物散布地）がある。また、南側には、下屋敷１号墳（古墳時代初頭？）や鬼付女西遺跡（弥生～古墳時代：住居跡ほか）、園田遺跡（弥生～古墳時代：住居跡ほか）があり、東側に約 500mは、鐙遺跡（弥生中期・古墳時代：住居跡ほか、古墳）や今別府遺跡（弥生前期：遺物散布地－板付Ⅱ式土器出土）などがあり、この地域は新富町における弥生～古墳時代の遺跡の密集地帯となっている。



1　志戸平遺跡
2　風早第Ⅰ遺跡
3　風早第Ⅱ遺跡
4　奥牟田遺跡
⑤　奥崎遺跡
⑥　奥遺跡
⑦　弁指平遺跡
⑧　富田村古墳8号

第2図　三納代地区遺跡位置図

1. 志戸平遺跡

〈遺跡の立地〉

本遺跡は、鬼付女川右岸において最大の水田幅を持つ海抜約８ｍの沖積平野に所在し、周囲は鬼付女川の氾濫浸食等により、島状の微高地形を形成している。なお、風早第Ⅰ遺跡、風早第Ⅱ遺跡を含む県道および鬼付女川で区切られる右岸においては以前区画整理事業（昭和９年）を実施しいてるが旧地形を基本的にはとどめているとおもわれ、西側の湧水部分より細かい数段の段丘を小さく開析しながら数条の小谷を刻んでいる。この右岸のうち北側より風早第Ⅰ遺跡、風早第Ⅱ遺跡、志戸平遺跡がつづく。

〈調査の概要〉

発掘調査は、遺物の採集されている地域を中心に削平がおこなわれる地区に幅約２ｍ、水田耕作土を排除するかたちで深さ約25～40㎝の試掘トレンチを東西３本、南北に５本入れ、確認作業を行った。当地の基本層序は、第１層　水田耕作土　約０～25㎝。第２層　明黄褐色砂質土　約25～40㎝。第３層　暗褐色粘質土　約40～54㎝。第４層　灰褐色砂質土　約54㎝～となっており、なお、遺構検出面は、第２層上面である。（第３図参照）

〈遺構と遺物〉

調査区北側（Ａ区）では、ほぼ東西に走り一部を共有する２条の箱掘りの溝状遺構（幅約35～45㎝、深さ約10～25㎝）やピットが30弱検出された。１号溝状遺構からは、磨石、有肩打製石斧やミニチュア土器、二重口縁壷の口縁片等の土器が出土している。２号溝状遺構は、検出されたその約２／３を１号と共有しているがほぼ同時期の土器片が出土している。余り時間差のない掘り替えの状況を呈している。

調査区北側（Ｂ区）では、２条の丸掘りの溝状遺構がほぼ南北に隣接し、並行に掘られている。３号溝状遺構（幅約45～65㎝、深さ約10～25㎝）からは、刻み目突帯をもつ土器片や凹線文土器片が出土している。４号溝状遺構は、溝底のみ検出で深さも約10㎝～０㎝であった。遺物はほぼ同時期と思われる土器のみである。

調査区北側（Ｃ区）では、トレンチ（２.５×５ｍ）から幅約４ｍ深さ 1.8mの排水路とおもわれる大溝が検出された。このなかからは、弥生時代終末～古墳時代初頭のものとおもわれる坏部より口縁にかけて外反する高坏の坏部が出土している。

〈まとめ〉

部分的な調査に終わったことにあわせ遺物が未整理の段階であるため詳細は後日とするがこの地が弥生時代中期頃より水田耕作をおこなっていた可能性は高く、１・２号溝状遺

構から水田耕作に伴う用・排水施設の弥生時代中期～終末の様相があきらかになることの意義は大きい。

2. 風早第Ⅰ遺跡

〈遺跡の立地〉

本遺跡は、標高14mの河岸段丘面を解析してできた小谷の出口にあたり、小扇状地形の扇端部は鬼付女川の氾濫原となっている。

〈調査の概要〉

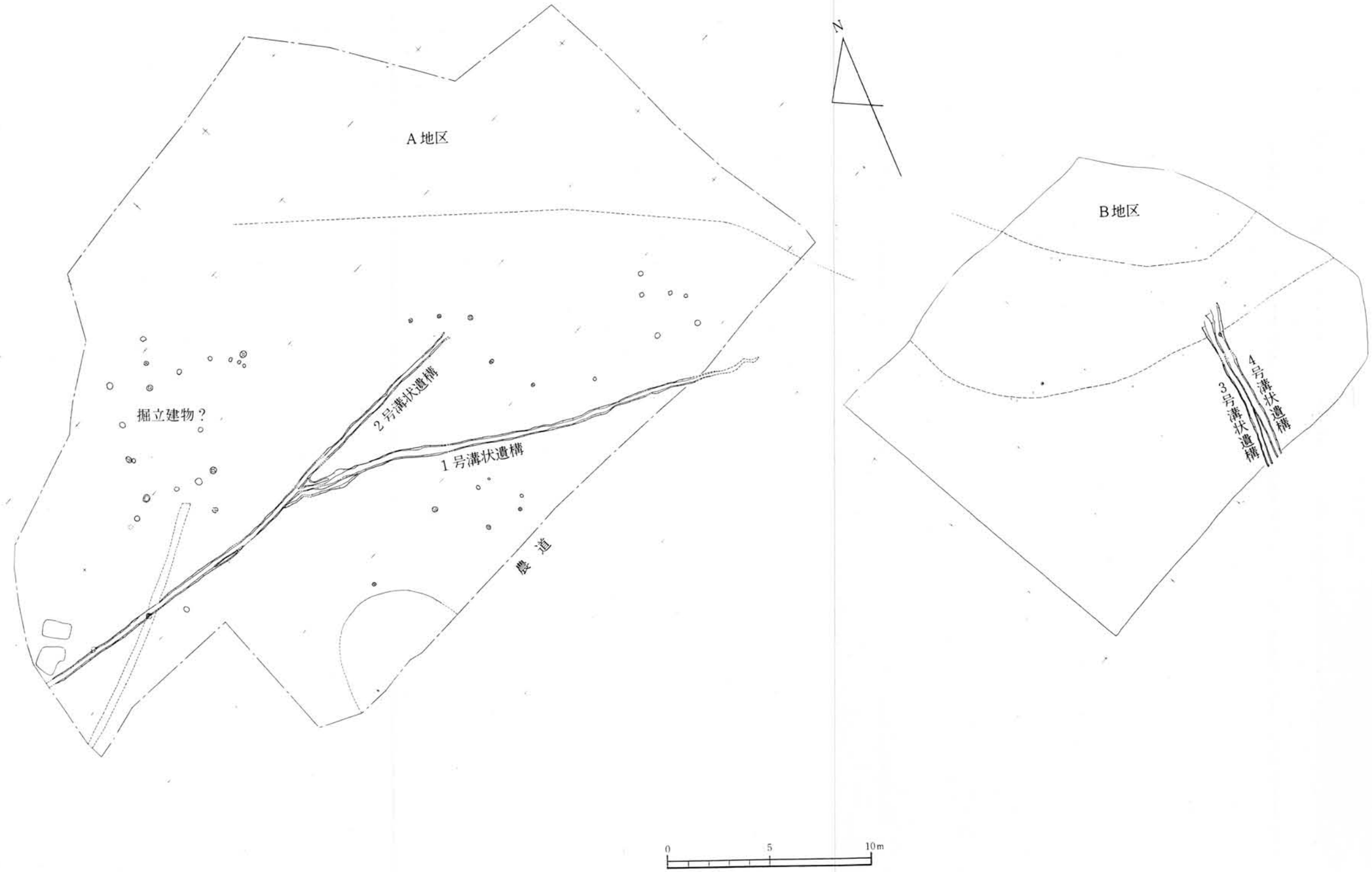
調査は、工事と平行しながら水田の畔に沿うかたちに縦横にトレンチ（試掘溝）を入れ地下遺構の確認をおこない、溝状遺構が確認された部分を中心に前面的な表土剥ぎをおこなった結果、溝状遺構が３条が検出された。溝状遺構の周辺の平坦部分については、水田に伴うことも考えられたことから水田耕作土下の土器片の広がる層まで精査したが水田遺構は、残念ながら確認できなかった。３号溝状遺構は、工事によりほとんど削平を受けないことで２号溝状遺構との合流部分に絞り、溝（河）底まで全面調査をおこなった。なお、この上流部分の流路は、県道に沿うかたちの排水路工事で確認されたが下流部分の流路については明確にできなかった。

〈遺構と遺物〉

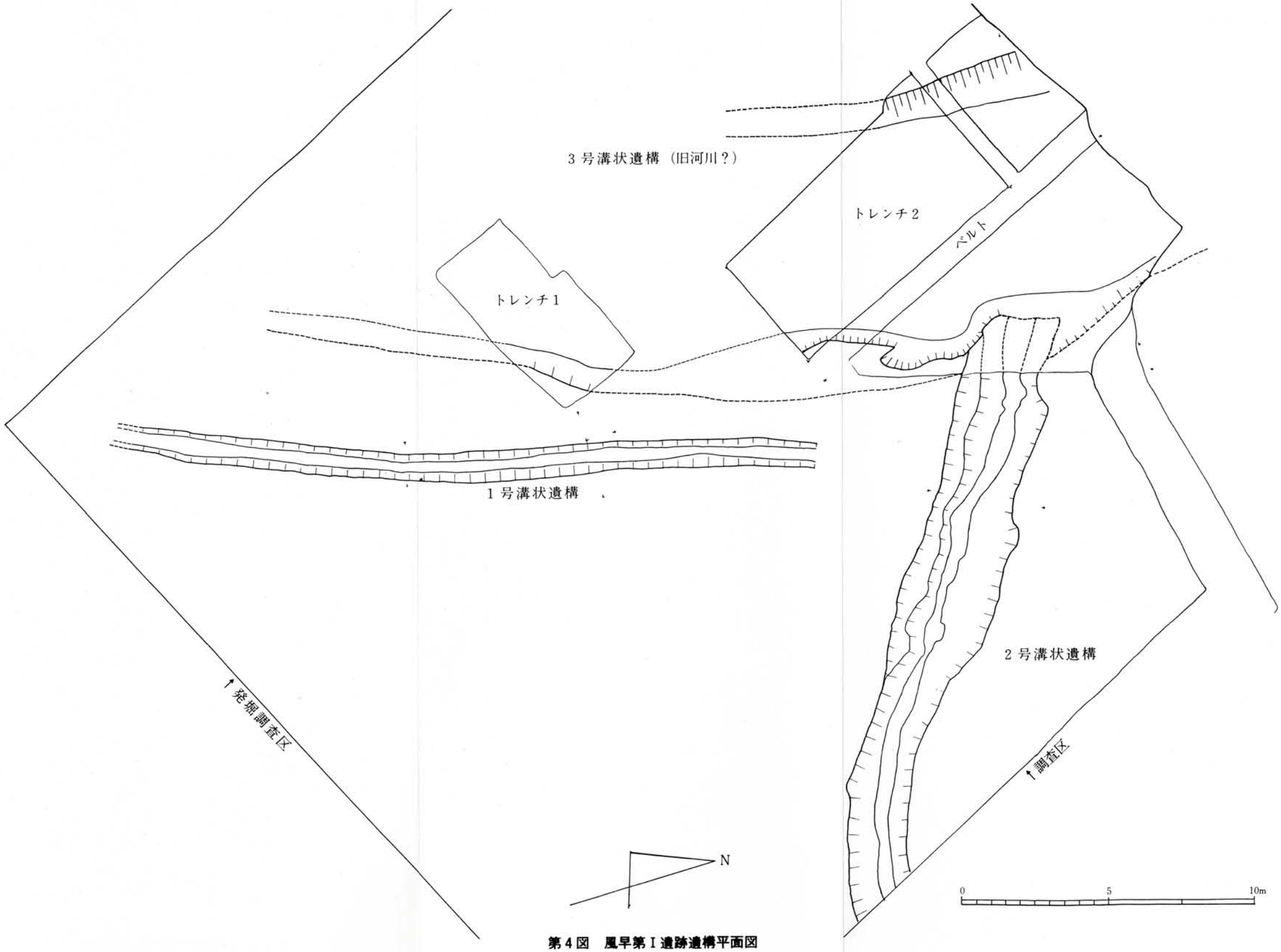
調査の結果、溝状遺構が３条検出され、それぞれ１号が２号に、２号が３号に直角に接している。１号溝状遺構は、幅約１m、深さ 120～30cm、の小さな溝で、出土遺物は少なく、磨耗した土器片が５～６点のみであった。２号溝状遺構は、幅約 1.2m、深さ約60cmでながれこみの土師器片が多量、出土している。３号溝状遺構は、比較的幅の広い（幅約 9.8m、深さ約 120cm）溝で古鬼付女川の支流とも考えられる溝で埋土は、砂質粘土、砂、礫層が何層にも互層をなしていた。遺物は、最下層の砂質粘土層に流木とともに頸部を欠いた壷（第６図１）や高坏の坏部が出土、そのほか小型丸底壷片、甕片が出土している。また、注目される遺物に木製の容器である「槽」や比較的細身で長舌であるが典型的なナスビ型鍬の完形品（第７図１）、ナスビ型又鍬の一部が検出されている。

〈まとめ〉

土器など未整理の段階であるが、この遺跡はこの氾濫原に刻まれた旧河川を利用した弥生時代終末～古墳前期の水田耕作に伴う遺跡であろう。



第3図　志戸平遺跡遺構平面図



第4図　風早第Ⅰ遺跡遺構平面図

3. 風早第Ⅱ遺跡

〈遺跡の立地〉

風早第Ⅱ遺跡同様に比較的発達した扇状地の扇頂部に位置し、南側に続く洪積台地より台地に含まれる礫や土砂が絶えず供給される位置にある。

〈調査の概要〉

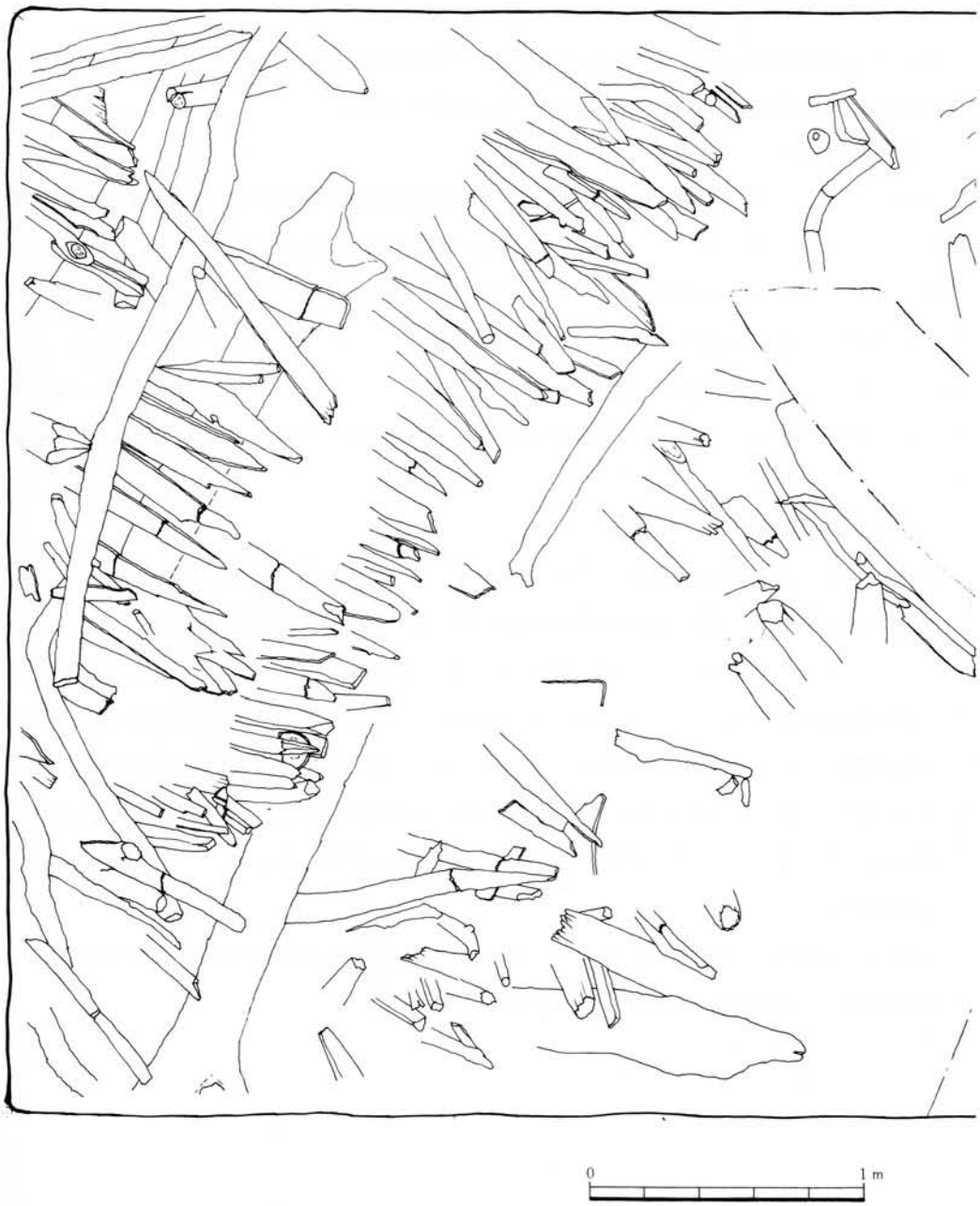
本遺跡は、第Ⅰ遺跡の南西 200mにあたり排水路付替工事の中で「杭」様のものが確認された。早速、工事を中止し、杭列の広がりを確認するため水田耕作土を約20cm削平し、南北に4m、東西に8mのグリッドを5区設定し、その他に1区を設定し調査をおこなった。仮排水路の北から0区、仮排水路の南に順次、1、2、3、4、5区とした。1～5区の間には、土層観察用ベルトを残した。このうち1、2区には、県内初となった「堰」の一部が検出されている。堰は調査終了後、今後の調査のため、川砂を充塡し、埋め戻した。

〈遺構と遺物〉

調査の結果、溝状遺構（水路）の一部が「堰」の一部を伴って検出された。この堰は、そのほとんどが挙大の礫を最大とする礫層に埋もれたかたちで出土しており、その用材はほとんどがクリ材とおもわれ、径が約20cmの丸太をほぼ八分割して出来上がった断面三角形の割り材を使用している。その他の出土遺物には、埋土である礫層上部から典型的なナスビ型又鍬のほぼ完成品（第7図2）が出土している。出土土器には、溝状遺構（水路）下部より、完形に近い壷（第6図2）や波条文が口縁外部に施された二重口縁壷の頸部（第6図1）やミニチュア土器等、多量の土器が出土している。

〈まとめ〉

土器など未整理の段階であるが、この遺跡はこの氾濫原に刻まれた旧河川を利用した弥生時代終末～古墳前期の水田耕作に伴う遺跡であろう。



第5図　風早第Ⅱ遺跡壜平面図

4. 奥牟田遺跡

〈遺跡の立地〉

本遺跡は、弥生時代終末～古墳時代の集落の可能性が考えられる奥遺跡の所在する舌状台地の南側裾部にあたり、また、弥生時代終末の同時期の農業生産遺構の可能性の強い奥崎遺跡の東側約 100mと極めて近接している。海抜10m内外の沖積面でも字名が示すように低湿な「牟田」である。

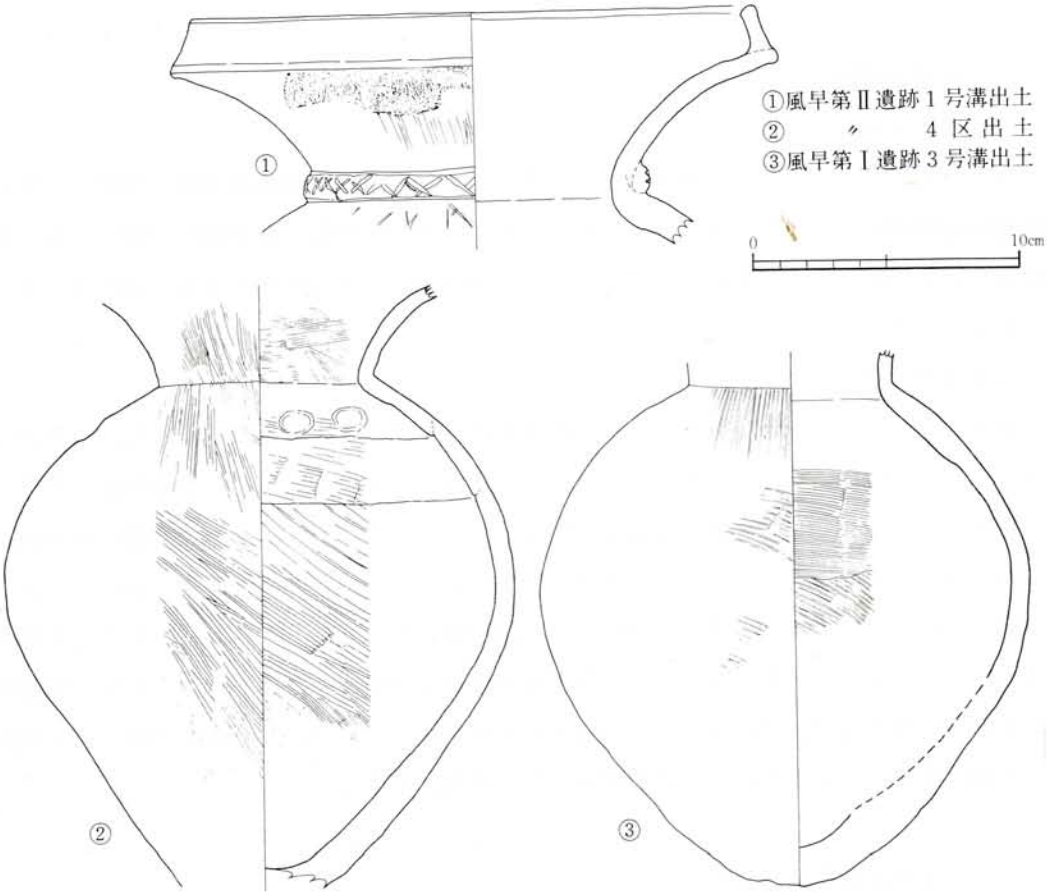
〈調査の概要〉

調査は、ほとんど土量操作が少なく、区画変更が主体のほ場整備地区のうち、削平が行なわれる水田の畔に平行に南北に2本、東西に1本、トレンチを入れ、遺構の確認を行った結果、第1トレンチの北側に土器集中部分が見られた外は、トレンチの下層に湧水が多くヨシ類が未分解の泥炭状を示し、遺物は確認されなかった。調査の過程で地元の方から現地は昭和30年代に沼沢を開田したことなど教示頂いた。また、北側トレンチの土器集中部分についても土器が平安時代のものや古墳時代のものなど混在していることや土層断面の状況から覆土の可能性が強いことで地元古老に確認したところ、昭和9年代のほ状整備で奥遺跡裾部などよりの持ち込みが確認され、調査は終了した。

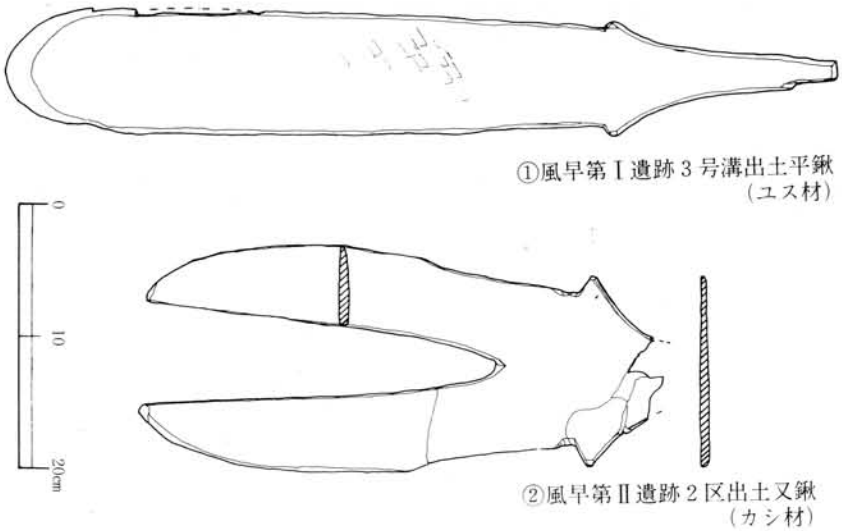
付. 突原地区遺跡確認調査

〈調査の概要〉

遺跡の所在が予想された突原地区もほ場整備の対象地について試掘調査を第9図のようにトレンチを14本入れて調査したが遺構・遺物は確認できなかった。

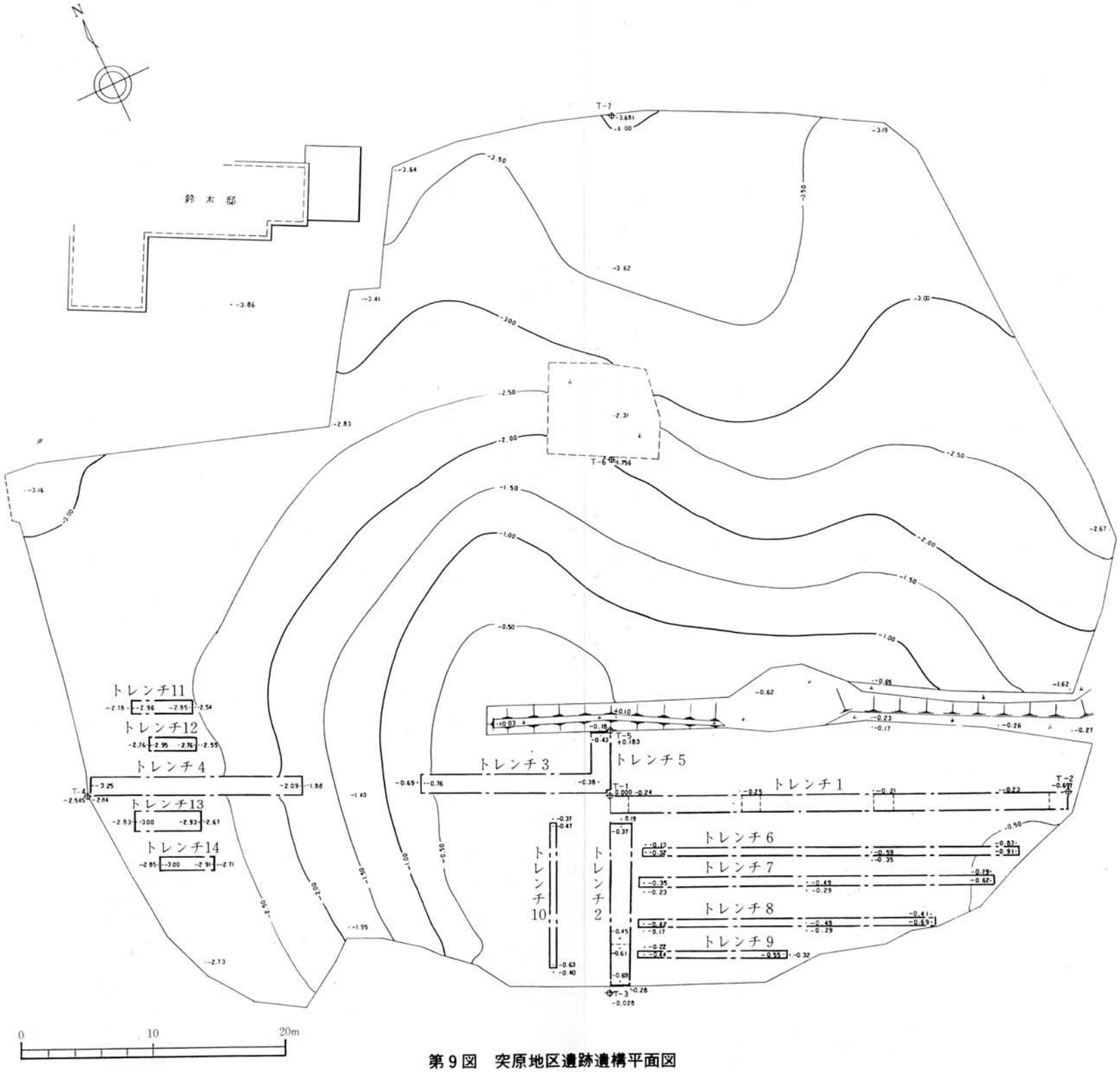


第6図　風早遺跡出土土器



第7図　風早遺跡出土木製農具実測図

第8図　奥牟田遺跡遺構平面図



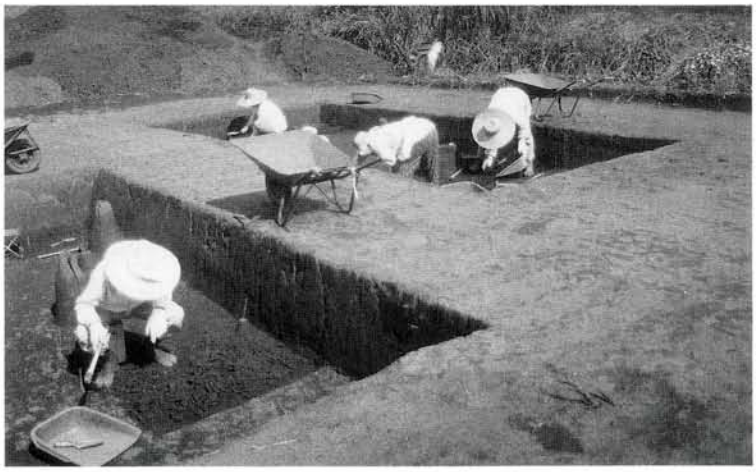
第9図　突原地区遺跡遺構平面図

志戸平遺跡A地区
（1号溝状遺構）
（2号溝状遺構）

志　戸　平　遺　跡
（1号溝状遺構）

風早第Ⅰ遺跡全景

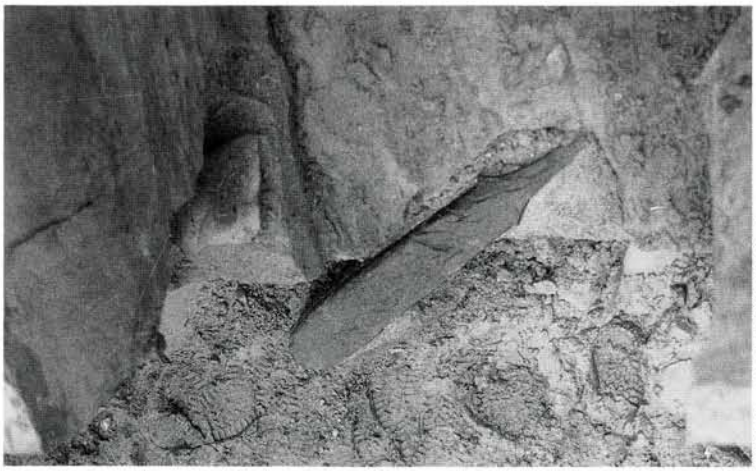
3号溝状遺構



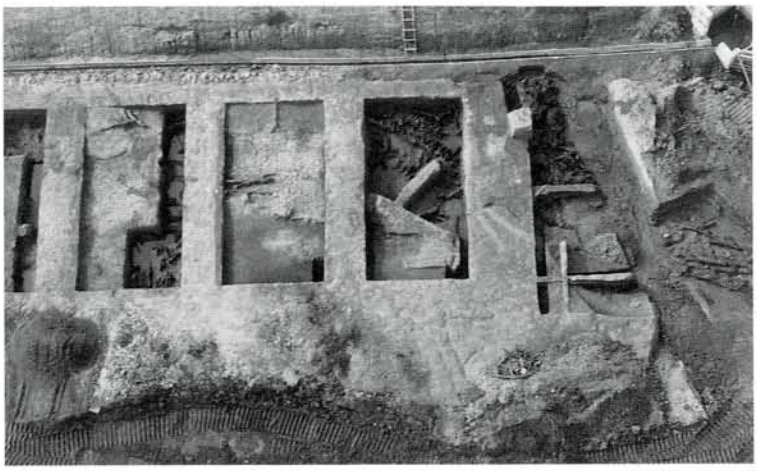
作業風景

風早第Ⅰ遺跡2号溝状遺構

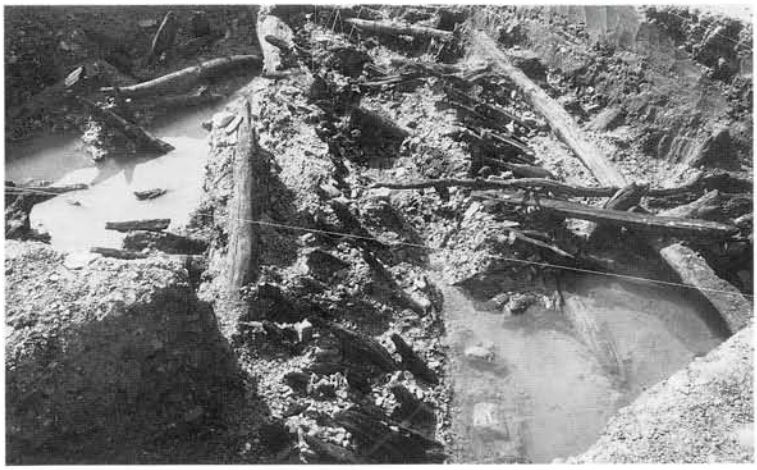
3号溝状遺構出土「槽」



3号溝状遺構出土「平鍬」



風早第Ⅱ遺跡全景



2区堰検出状況　北より

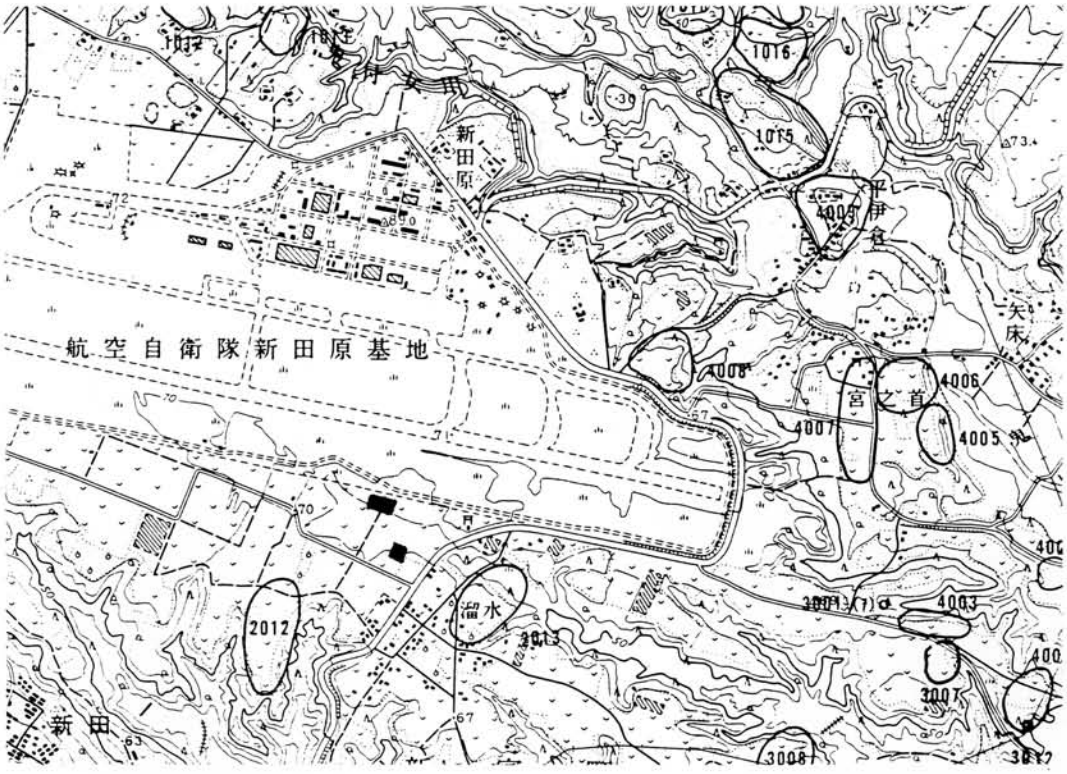
2区堰検出状況　西より

第三章　溜水地区遺跡

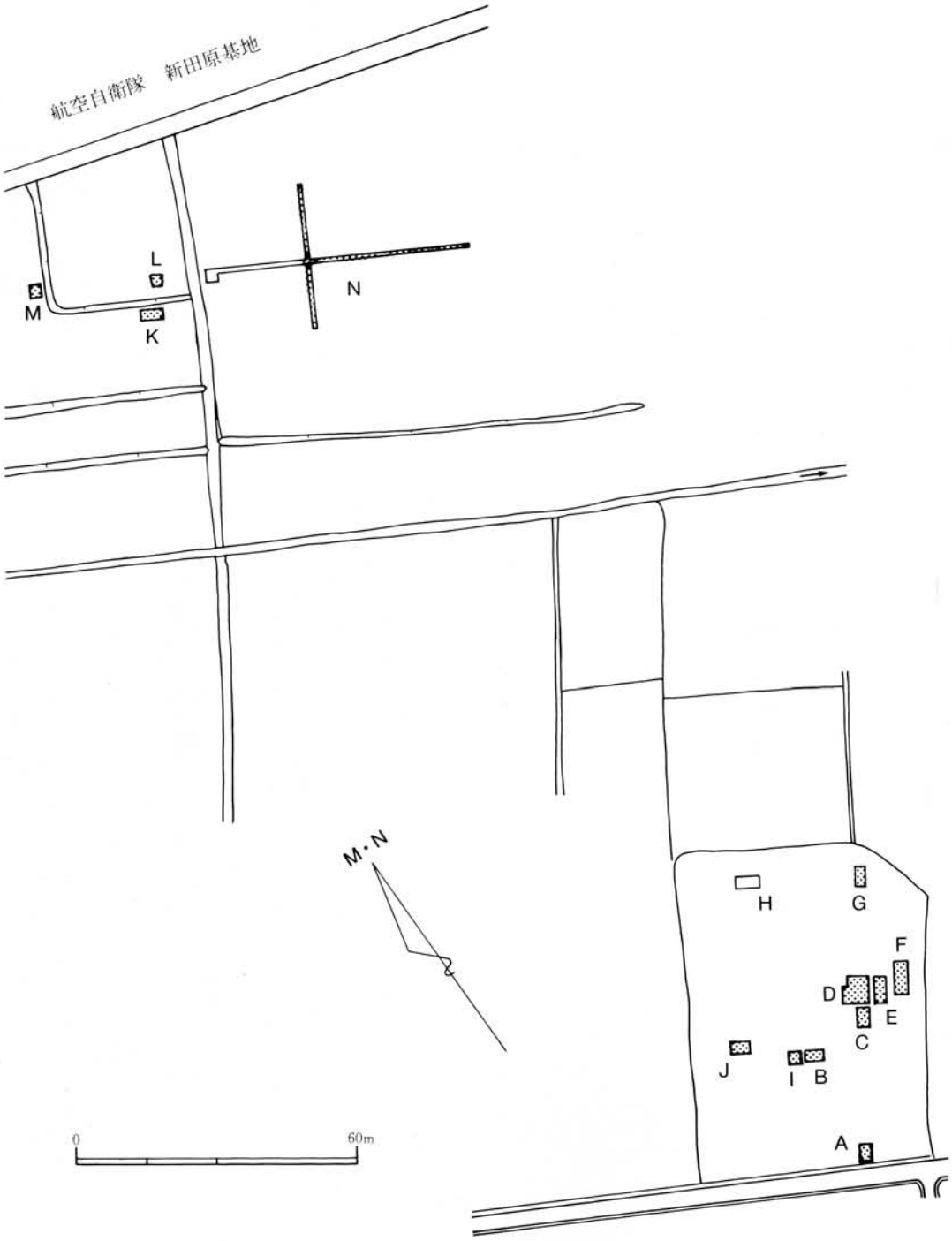
1.　はじめに

本遺跡は、新富町教育委員会による遺跡詳細分布調査で弥生時代の散布地とされた溜水遺跡に隣接する地区にあたり、県営ほ場整理事業に伴う確認調査で縄文土器・焼礫等が出土し当該期の遺構・遺物の存在も予測された。

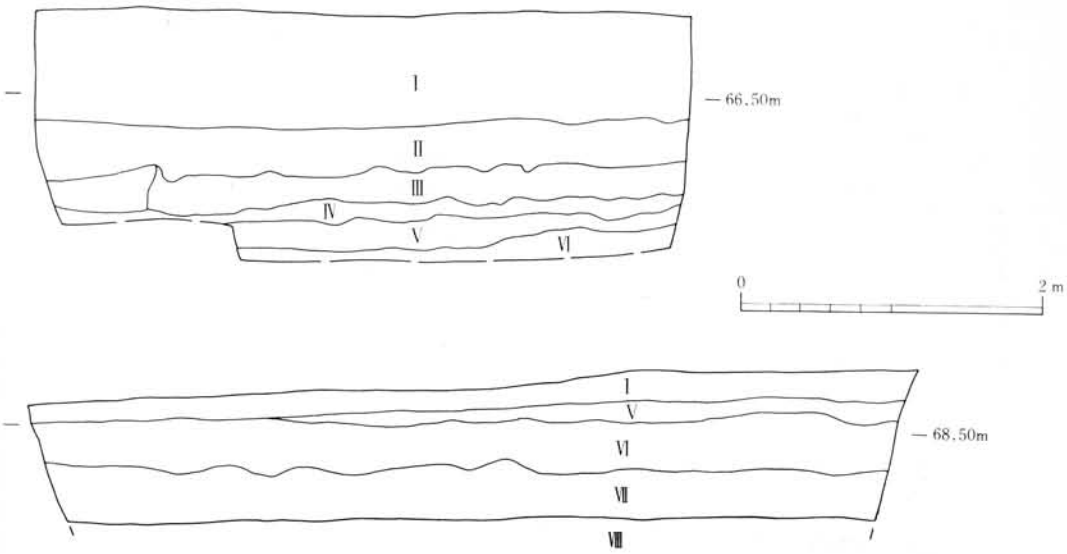
標高約70mの洪積台地（新田原面と呼称される）上に立地する本遺跡近辺には、弥生時代中期末～後期初頭にかけての集落である新田原遺跡や、弥生時代後期～古墳時代にかけての住居跡が多数検出された七又木地区遺跡、さらには国指定史跡の新田原古墳群が存在する。



第1図　遺跡位置図S＝1/25,000



第２図　調査グリッド配置図



第3図　層位断面図（基本層序は下記）

Ⅰ　耕作土・客土　土器・焼礫・土器片を若干含む。重機を使用して剝ぐ。

Ⅱ　黒色土　軟質　含有物少ない。

Ⅲ　にぶい黄橙～明黄橙色土　アカホヤ層ところどころ腐植化し濁る。

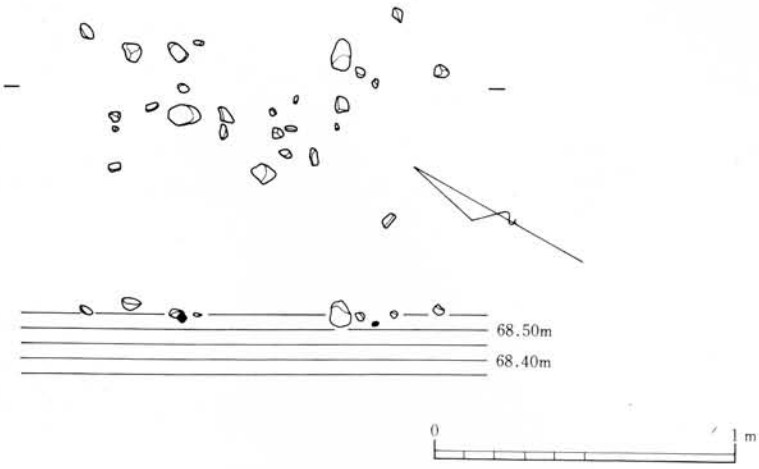
Ⅳ　灰黄褐色土　オレンジパミスを含む。

Ⅴ　黒褐色土　かたいまる。

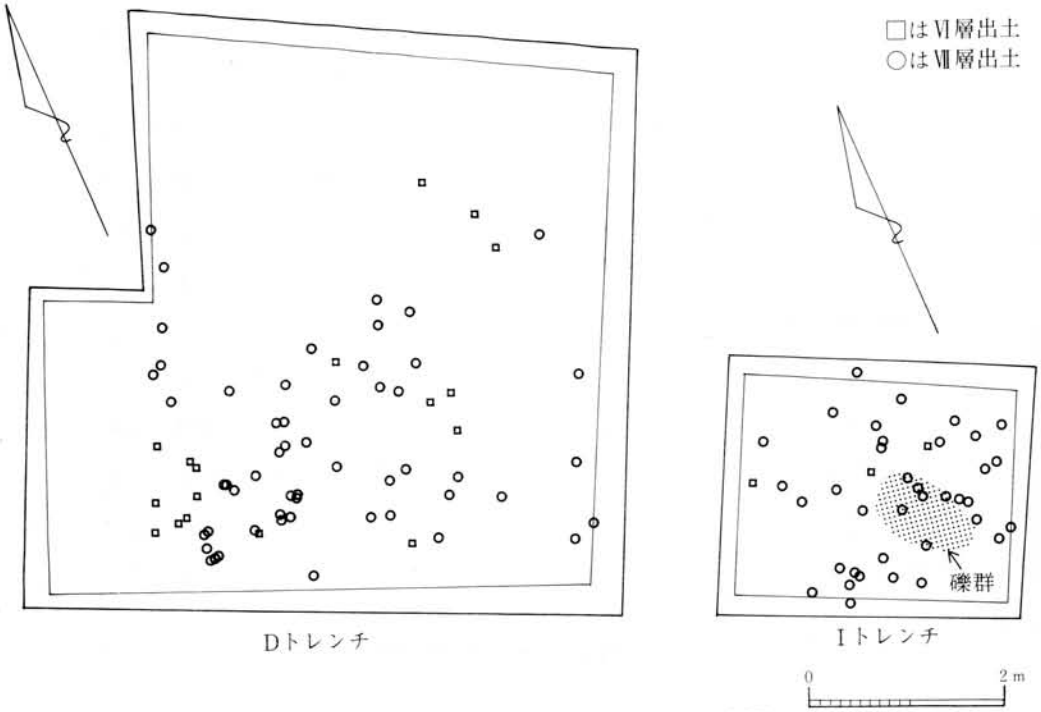
Ⅵ　にぶい黄褐色土　かたいまる。

Ⅶ　にぶい黄褐色土　Ⅵより若干明るい　Ⅵ層下部からこの層の上部にかけて遺物が出土。

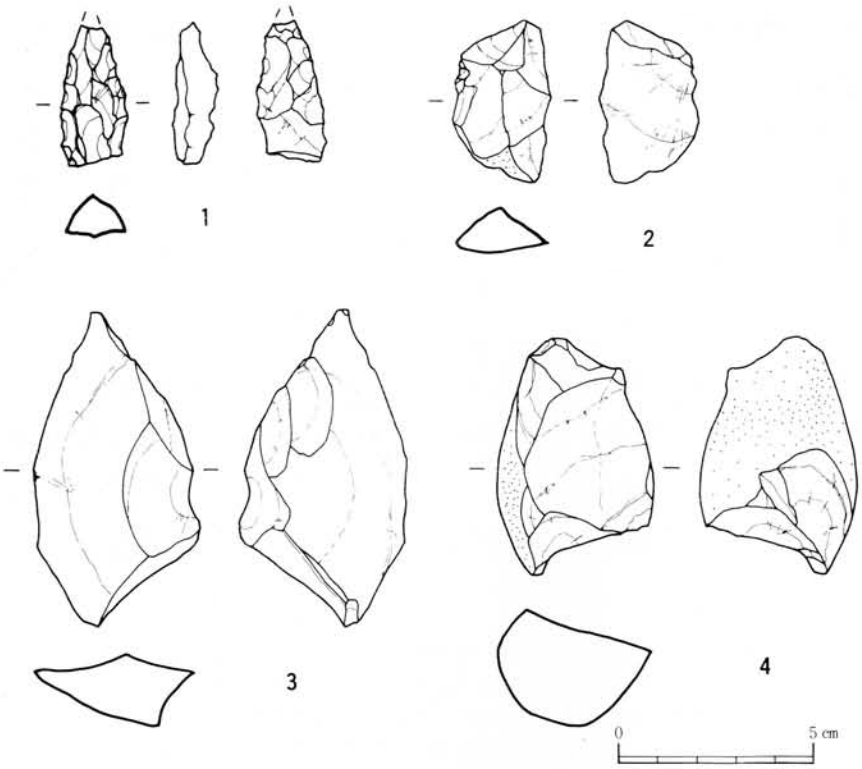
Ⅷ　黄褐色土　ただしところどころ白味がかったところも。砂質、やわらかい。ＡＴ層か。Ⅶ層との層界は不整合となる。



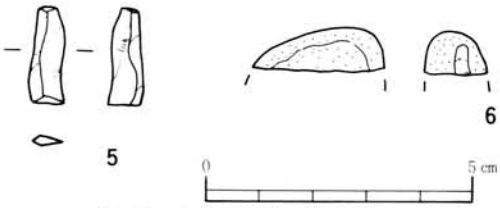
第4図　礫群実測図



第5図　D･Iトレンチ遺物・焼礫平面分布図



第6図　石器実測図(1)



第7図　石器実測図(2)

2.　調査の概要

発掘調査に際しては、まず対象区の表土（Ⅰ層）を重機使用により除去した。その結果、ほとんどの部分でアカホヤ層（鬼界カルデラ起源の火山灰層）まで削平されていることが確認さた。そしてⅣ層以下の層について掘り下げを進めたが、当初予測された縄文時代早期の遺構・遺物は皆無であった。

このため、浅い谷をはさんで相対する台地上にトレンチを入れ、各時代の遺構・遺物の集中箇所を探す方法をとった。Nトレンチなど、主として弥生時代以降の遺構検出を目的とした調査と並行してⅥ層下部、Ⅶ層上部にかけて認められた旧石器時代の文化層の掘り下げを行なった。結果的には前者については成果が上がらず、ブロックと捉えられる遺物集中範囲を検出した。

3.　遺構と遺物

旧石器時代の遺物は、Dトレンチ、Ⅰトレンチを中心に約 180点出土している。またⅠトレンチでは礫群も検出されている。礫群は、長径 100㎝、短径50㎝の規模で、大きな礫についてはほぼ全て赤変している。遺物のうち1は尖頭器、5は細石刃、6は細石核と考えられる。6はいわゆる畦原型細石核であろうか。側縁に剝取の痕跡が認められる。下方は自然に割れたものか。その他は、不定形の剝片がほとんどである。頁岩・砂岩のものが多いようである。

4.　おわりに

本遺跡は、地形的に見ても長期間営まれた遺跡であったことが推測できるが、今回の調査によって旧石器時代の文化層のみが残存していることが確認された。詳細な検討を行なっていないため、時期について特定はできないが、細石器文化期のブロックである可能性が考えられる。礫群の評価と合わせて、検討に値する資料といえよう。

（注）

1.『新富町の文化財遺跡詳細分布調査報告書』　1982　新富町教育委員会
2.「新田原遺跡」『新富町文化財調査報告書第4集』1986　同上
3.「七又木地区遺跡」『新富町文化財調査書第8集』1989　同上

新富町文化財調査報告書 第14集

県営農村基盤総合整備パイロット事業
(尾鈴Ⅱ期地区三納代・溜水・突原工区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

三納代・溜水地区遺跡

発行年月日　1992年3月
発　　行　新富町教育委員会
印　　刷　㈲印刷センタークロダ